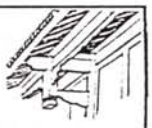
残雪会見記



藤重 典子

去年の８月４日午後２時から、新宿駅の喫茶店で残雪に会った、というより残雪と近藤直子さんに会った。こちらは釜屋修先生と加藤三由紀さん、それに私。

不思議な時間であった。残雪は細長くしなやかな腕と、笑った時の口元が愛らしい少女的風貌だ。しかし油断してはいけない。その笑顔が不意に嘲笑に変わり、毒矢が飛んでくるかもしれないから。近藤さんは濃いまつ毛の下の黒い瞳が印象的な少年的風貌で、残雪の良きスポークスマンといった感じだった。残雪は目を伏せ、ぶっきらぼうに投げ出すように回答する。近藤さんが分かりやすく補足し、膨らませる。それでこちらは「なあるほど」と納得する。何とも息の合ったコンビなのだ。

残雪は出版社（河出書房新社だろうか）の招きで日本に来ていて、近藤さんの住まいに滞在中だった。アメリカ行きのビザが下りるのを待っているということだったが、八月の末、まだビザが下りないという話も聞いた。だから日本での残雪については近藤さんが一番よく知っているのだが、近藤さんはおそらく物書きのネタよりも、残雪とのプライベートな友情の方を重んじるだろう。二人は音楽を聞いたり散歩をしたり仕事をしたりして生活しているようだった。

他にも残雪に会いたい人がいたかもしれないが、茶店で話という形式になったのは、残雪の個性を慮んばかってのことらしい。加藤さんが電話で「講演かなんかしてもらうよりも」云々と言ったように記憶する。

私の会った数少ない作家のうち、丁玲と鉄凝は心の中までのぞき込むようにこちらの目を見つめたし、諶容は周囲の人々に暖かくさりげない心遣いを見せつつ、どん欲に取材し観察しているのが感じ取れた。一方残雪の会見記には、彼女が全くしゃべらないという記述とよくしゃべるという記述がある。雑志『文藝』の日野啓三との対談はみごとなリップサービスぶりだ。

さて、残雪に聞いてみた。

Q：今の中国の作家で誰に興味がありますか？

A：興味はありません。

そのくせ、彼女は『ユリイカ』では莫言こきおろしをやっている。興味がないのなら、放っておけばいいではないか。莫言が力があるから批判するのだろ

う、才能のない作家の批判などしないものだ、と言ったら「そうではない」、と答えた。その理由は述べなかった。

Q：去年の六四事件をどう思いますか？

A：関心はありません。

これは明らかに挑発的質問だから、つっぱねるのがいいのかもしれない。こちら側には圧倒されたのか辛かったのか、思わず下を向いた人もいた。

私は彼女の「裸足の医者」としての経歴を聞いてみたかった。彼女の作品に頻出する病人と、飲食や部屋・身体の汚れにこだわる健康・衛生感覚が作品に不思議な彩りを添えているからだ。これについて尋ねたら、「十七歳の頃から一年間医者をした。しかしそれも高度な専門知識を持ったものでなく、毛沢東の提唱に答えたものだ」、と答えた。彼女にも少女時代に毛沢東に心酔した時期があったのだろうか？　そこで「若い頃毛沢東についてどう思っていたか」と尋ねたら、「別に自分とは関係のない人だ」と答えた。

近藤さんが残雪の息子がとても賢いこと、夫婦でやっている裁縫の店が腕がいいのでとても繁盛していることなどを語ってくれた。こうなると、この良き小市民的生活と、彼女の文学の関係が聞いてみたくなる。

私が、「実際生活と芸術は何か関連あるものではないか」と切り出したところで「不一定」と言われた。あとで加藤さんが同じようなことを言ったら、「有道理」と言っていたそうだ。私の聞き方には明らかにトゲがあった。残雪はそれをつっぱね、加藤さんの言った方を受け入れた、ということだろう。また加藤さんの「あなたの小説はあなたの経歴と何か関係があるのか」という質問には「ある」と答えている。

更に言えば、中国作家協会に入らないことが彼女のアイデンティティの一つだと私は解釈していた。中国の若手の評論家が「残雪は作家協会にも入らない変わり者」と言っているのを聞いたことがあるし、彼女は個体戸としての誇りを持ち、「招聘作家」でいたいと表明したことがある。「招聘作家」の意味が私は取りきれなかったが、作品の良さによって選ばれ続ける作家、と解釈していた。しかし今回聞いてみると「別に入ってもどうってことない」という感じで入っていた。こっちの思い込みが強すぎたのか、あるいは残雪が変わったのか、それともあんまり勧められるので断わるのが面倒になったのか。

また、近藤さんは残雪の故郷まで行ったそうだが、素晴らしく風光明媚なところだと感極まったように語ってくれた。それから彼女は体の鍛煉に励んでいて、一日に腕立て伏せを三千回するという。

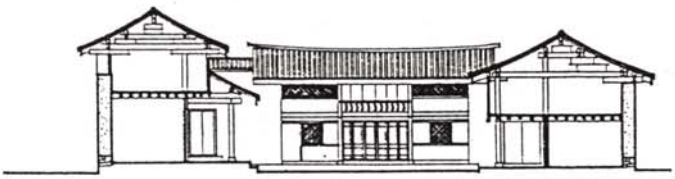
ずっと下を向いて日本人同士でしゃべるのをやりすごしていた残雪は、おしまい近くなって急に気を遣ったのか、「中国の評論家で誰がいいか」と聞いて

きた。やはり評論家は気になる存在なのだろう。最後に加藤さんが「みんな、あなたの小説を読んでわからないと言っている」と述べると、「わからないということは、わかっているということでしょ」と言ったそうである。

まあ、こんなところだった。

私は大いに反省している。残雪が煮ても焼いても食えないタイプであると最初からわかっていた筈である。それなのに、せっかく時間を裂いてくれた彼女の好意に、愚かな挑戦をしてはねつけられてしまった。私は相手にのめりこむか、あるいはそのふりをして何かを引き出すような、したたかなプロ意識もなかったし、和やかに話をしてくつろがせ、楽しい時間を作り出す友情への努力もしなかった。

ガルシア・マルケス
上海へ観光（?）旅行　（文学報 90.10.25）

■最初の中国訪問であるが、観光客の身分で日本経由。同行は夫人、マネージャーのバサール女史と「中国語のわかるメキシコ人の友人」のみ。『文学報』記者たちが新錦江ホテルのマルケスに会えたのはアメリカへ出発の朝5時。ジーパンにメキシコ風上着、シルクのスカーフのマルケスは、氏の作品が中国の中青年作家に愛されているとの話に感謝の意を表明した。日本語訳本は手にいれた氏の中国訪問目的は観光と中国語訳本の入手だった。

（釜屋）